



龍谷ミュージアム

設計:赤木隆+下坂浩和/日建設計

京町家の風情を活かす

赤木 隆 | Takashi Akagi

下坂浩和 | Hirokazu Shimosaka

地下へ展開するエントランス

「龍谷ミュージアム」は、龍谷大学創立370

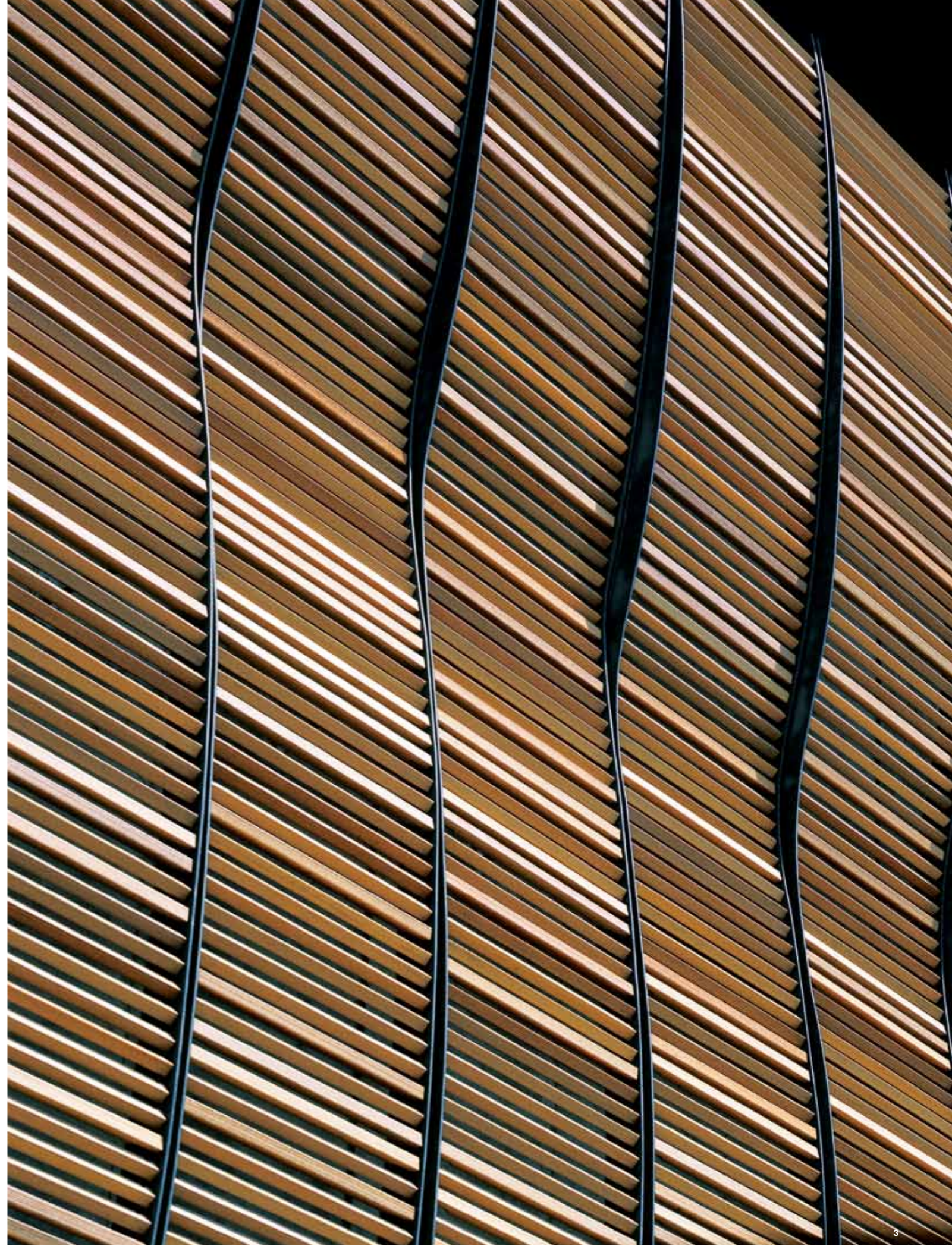
周年事業の一環として開設された、日本初の本格的な佛教の総合博物館である。

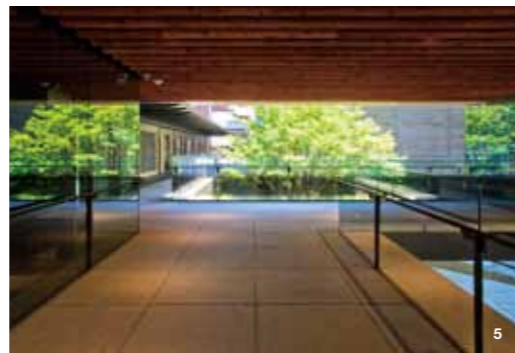
このミュージアムは、龍谷大学や西本願寺の宝物を展示する他、佛教博物館として浄土真宗に限らず、佛教に関する資料の実物展示を主にしている。

敷地は、堀川通を挟み西本願寺御影堂門の真向かいに位置している。このミュージアムの北側に位置する脇道の正面通は、仏具屋な

ど昔ながらの仕舞屋^{しもなや}が並び、京町家の風情が残っている。

京都市では近年、景観規制が施行され、この西本願寺近辺でも絶対高さを15m以下にする必要がある。15mの高さの中に2層の展示室(約1,000m²)とエントランスを納め、勾配屋根を持つ外観にする条件を逆手に取り、1階はできるだけ低い天井高さにし、1階の軒を極力押さえ、地下へ展開することにした。





地下1階をエントランスにし、1階の大半は吹抜け空間とし、地下に来館者を下ろす構成とした。このことにより1階ピロティ空間に立った時に1階と地下1階の空間を見渡すことができ、より透明感のある入りやすい空間をつくることできた。

地下1階の中庭やエントランスホールは、周囲の壁を花崗岩の乱積みとし、重厚さの中にも温かみのある、包まれるような空間とした。中庭の南側を見上げると下見張り風のスギ小幅板コンクリート打放し仕上げの壁がねじるように中庭側に迫り出している。これは2、3階のエレベーターホールを広げる工夫として壁を迫り出し、見る者にハッと思わせる造形とした。

また、堀川通の喧騒さを和らげ、落ち着いた中庭を通り、展示空間へ導くアプローチとともに、この中庭を介して通り抜け通路が堀川通と油小路通を結び、改修された敷地北東に建つ伝道院(設計:伊藤忠太)や正面通のアプローチ通路としてまちの活性化にも役立てる空間とした。

来館者はこの地下1階のエントランスへ導かれ、建物中央にある階段とエレベータで上階にある展示空間へと移っていく。この階段は展示空間へ近づくにつれて少しずつ照度を下げ、貴重な資料を見るにふさわしい空間へとつなげている。

「**簾の向こうに何らかの“気配”を感じる外観**」ミュージアムの正面となる堀川通の外壁には、約4,000本のセラミックルーバーによる簾を架け、京町家のように、この簾の向こうに何らかの“気配”を感じる外観とした。

京都らしいデザインとすると同時に、西面外壁を太陽光から守り、館内温度の上昇を抑える機能を併せ持っている。

西本願寺が大屋根などの大胆さと、木造作などの緻密さを併せ持つのに倣い、ルーバーも、ダイナミックさと繊細なデザインを心がけた。「龍谷ミュージアム」のコンセプトは「情報発信と収集」ということから“波紋”という言葉を採用している。ルーバー面は、西本願寺所蔵の国宝「西本願寺本三十六人家集」の絵模様による波模様を各ユニットの断面に置き換えて形づくった。

一方、極力細くした35mm角のセラミックルーバーは、色や表面のスクラッチパターンが微妙に異なるものを数種類用意して、ルーバー一面に対して正対と45度の2種類の取り付け角度をランダムに配置することで、自然素材の持つ豊かな表情が生まれ、西側外装簾の“ゆらぎ”を形づくっている。

あかぎ・たかし——日建設計設計部門デザインパートナー/1953年生まれ。1972年、兵庫県立兵庫工業高等学校建築科卒業。同年、日建設計入社。
 主な作品:大阪府立図書館[1996]、あけぼのパーク多賀・多賀町立図書館[1998]、広島修道大学図書館[2002]、龍谷大学大宮学舎大宮図書館[2006]など。
しもさかひろかず——日建設計設計部門設計主管/1965年生まれ。1988年、神戸大学卒業。1991年、同大学大学院修士課程修了後、日建設計入社。
 主な作品:宇治市源氏物語ミュージアム[1998]、大阪府済生会中津病院 北棟[2002]、桃山学院大学聖ヨハネ館[2009]、日本興亜日本橋ビル[2009]など。

1—多目的室からエントランスホールを見る | 2—西面全景[写真:東出清彦] | 3—セラミックルーバーの詳細 | 4—堀川通から見る | 5—堀川通と油小路通をつなぐ1階通り抜け通路 | 6—エントランスホールへと誘う中庭:下見張り風の壁が印象的

